

IJ学級通信

IJ学級 学級通信 No.17
令和 8年 2月20日(金)

劇と音楽の会

2月6日(金)に、第40回劇と音楽の会が東大和市民会館ハミングホールで行われました。IJ学級の演目は、3年I組田中悠希さんのピアノ伴奏による合唱「変わらないもの」、群読劇・合奏「千と千尋の神隠し」でした。

IJ通信16でも書きましたが、大勢の観客の方の前で舞台の上に立つということは、大変な緊張を強いられます。しかし、IJ学級の生徒は、その重圧を渾身の力で跳ね返し、見事な発表を披露することができました。校長先生をはじめ、J学級の社会科の講師の野崎先生、また多くの保護者の方からお褒めをいただきました。発表後の生徒の表情には、やり遂げた達成感と重圧から解放された安ど感に満ち溢れていたように感じました。

最後に、ハミングホールまで足をお運びいただきました保護者の皆様、ありがとうございました。またご都合でご出席が叶わなかった保護者の皆様、生徒はこの日に向けて努力を続けてきたことをご報告いたします。



連絡

- ・3月2日(火) 15:00~16:00 (※2学年は16:30まで) IJ学級保護者会をIJ9番教室にて実施します。詳細は、先日、配信してある「すぐーる」をご覧ください。
- ・3月7日(土)に「ひばり文化の日(校内作品展と舞台発表)」を行います。校内作品展では、日々の授業で取り組んできた学習の成果をIJ教室、ホールに展示します。舞台発表では、「劇と音楽の会」の様子を体育館にてDVDで上映します。ぜひ足を運んでいただき、ご鑑賞ください。

今回、生徒理解の視点に立ってお伝えするのは、かつて通常学級に在籍していて、中学1年生の時に、特別支援学級に転籍してきたC君についてです。

C君は、やや落ち着いたのなさが見られたものの、知的な面での課題が目立たず、周囲の人には、学習に対して努力の足りない生徒とわれてしまっていました。しかしC君自身は、他の生徒と自分を比較して、何をやってもうまくいかないことを自覚し、仲間からも軽く扱われがちでした。自尊感情も少しずつ低下し、クラスの中でも孤立気味になり、次第に学校から足が遠のいてしまいました。

特別支援学級（当時は、心身障害学級）への入級のきっかけになったのは、他校の生徒との付き合いができた中で、問題行動を起こしてしまい、ご両親が学校外でのC君の行動を知ったからでした。心配したご両親が担任に相談したことで、これまで学校生活の中で分かりにくかったC君の特性がわかってきました。担任の先生は、校長先生や校内の教育相談担当の先生に報告し、ご両親と面談を重ねて、就学相談を受けることになりました。その結果、C君は特別支援学級に入級することになったのです。

入級した当初のC君は、毎日登校して来るものの、授業中は机に伏せ、先生の声掛けにも耳を貸さず、周囲の生徒とも距離を取り続けました。また、話しかける学級の仲間を威嚇するような行動もありました。対応に苦慮した特別支援学級では、ご両親や前在籍校の担任と連絡を取りつつ、C君との面談を繰り返しました。当初は、反抗的な態度をとり続けていたC君でしたが、少しずつ心を開き始め、とつとつと自分の心の内を語るができるようになってきました。

C君自身は、特別支援学級に入級したことで、「自分はダメなやつ」と思っていること、「できない、わからない自分」と思っていることを周囲の人に気づかれないこと、自分の弱さを見せたくないため虚勢を張っていたこと、以前にも失敗することが多く、「また何か失敗するのではないか」とびくびくし、失敗を常に隠そうとしていたことなどがわかってきました。

保護者の方もご存じのことですが、特別支援学級では、生徒個人の教育的ニーズや保護者の方の願いなどをもとに個別指導計画を作成しています。C君の場合も本人の様子を整理し、指導指針として、適応能力の基盤になる自己有用感¹⁾をはぐくむことを指導の重点としました。その基本となることは、C君自身が自分の長所に気づくことができるようになることです。そのためには、具体的場面で他の生徒の行動からその人のよさに気付かせること（モデリング）や、自分の感じていること、考えていることを文章で表現させ、自分自身を見つめさせることが有効であると考えました。そうすることで、周囲に愛される人格に気づかせ、C君自身が改善の努力をしていく姿を実現することが、C君の自己有用感をはぐくむことにつながると思われます。また、良い行いには、他の生徒にもわかるようにその場でほめる（即時評価の原則）ことを職員が共通理解して、対応しました。

数か月がたち、少しずつC君の表情は和らぎ始めました。係の仕事や当番活動にも取り組み始めるなど前向きな姿を見せ始めました。そのようなC君の心の変容は、他の生徒にも目に見える形で伝わりました。周囲の生徒は、C君を学級の一員として、受け入れ始め、C君自身も周りの生徒と打ち解け、学級の中で自分の良さを発揮しながら穏やかな学校生活を送るようになりました。

時間がかかりましたが、C君は自分の「居場所」を見つけることができたのです。

C君は中学校卒業後、都立特別支援学校高等部に進学しました。高等部卒業後は、造園会社に勤めました。造園芸に関する知識もなく、体力的にもきつく、就労当初は大変苦勞しましたが、社長さんをはじめ、従業員の方に可愛がられました。C君もやる気を出して、会社のトラックを運転するため、自動車免許も取得して、今でも元気に働いています。現在、46歳になり、二人の子の父です。

生徒一人一人の力を伸ばしていくために、より良い環境を整えていくことが必要です。大人である私たち、保護者の方と教員がこれからも力を合わせていくことが重要だと考えます。

1) 自己有用感 自分の所属する集団の中で、自分がどれだけ大切な存在であるかということを自分自身認識すること。